ノイローゼとポックリのご利益（伊勢シリーズその２）

大正大学教授　玉山成元

伊勢の松阪からルート四二号線を下り、紀伊長島に行くちょうど中間、緑濃い自然に恵まれた多気郡大台町下楠の道端に、祐天上人の名号石がある。弘化三年（一八四六）九月祐天上人の百回忌を記念し、宝泉寺植誉上人代に建立されたものである。一・五〇メートルほどの自然石に祐天上人のお名号を彫ったものであるが、横長の自然石の上に立っている。昔から約15度ほど前方に傾いているが、どんな地震でも倒れたことはない。地元の人々は、この名号石を祐天さまといい、毎晩お詣りする人が十数人もいる。名号石の左側には1メートルぐらいの常夜灯があり、夜になるとローソクがともされる。常夜灯は天明元年（一七八一）十月に中西氏が寄進したものであり、それ以後、代々受けつがれてきたが、現在は近在の人々で講中のような形をとり、灯をつける当番がきめられている。暗夜の道しるべとして陸の灯台ともなり、距離の目じるしにもなったことであろう。

ところでこの祐天さまには、悪因縁を断ち切るというご利益がある。名号石と台石のつなぎ目には、数固の錆た鉄片が落ちている。昔はここが鎌で止められていた。鋭利な鎌で悪因縁を断ち切るためであった。その鎌が長い年月の間に風化し、現在では錆た鉄片となったのであろう。

悪縁の内容もさまざまであるが、土地の人たちは自分の身にふりかかる不幸を断ち切るために真剣に供養を続けてきた。その中でも現在の悩みの主流は、長患いをせず、ポックリとお迎えいただくことである。祐天さまにはそのご利益があるというので、毎晩信者は欠かさずお参り続けるという。近来とくに老病のことが問題となっているだけに、お年寄りにとっては切実なことである。奈良のポックリ寺のように、やがてバスによる集団参詣があるかもしれない。

宝泉寺はここから一〇〇メートルほど入った高台にある。目の前には一面の茶畑がつづき、その後方に形の良い山々が連なっている。雨あがりのせいか緑の色がことのほか美しい。私が参詣したとき、山桜は終わっていたが八重桜はさかり。見渡す所々にピンクの山つつじゃ明るい紫の蘇芳が一段と映えた。雑踏の中で生活している私にとっては命の洗濯であった。だから清々しい気持ちで祐天さまを拝むことができた。

宝泉寺にある祐天上人の座像は、高さ40センチ余の小さなお厨子に安置されている。作者や製作年代はわからない。扉の内側には「明蓮社大僧正顕誉上人愚心祐天大和尚享保三戊戌年七月十五日寂ス」と記してある。緋衣に金欄七条袈裟をつけたお姿であるが、お顔はとても若い。お厨子の中には木版刷りの祐天上人のお名号と徳本上人の利劔名号が納められている。祐天上人のお名号は、「南無阿弥陀仏　大僧正祐天（花押）」とある右に「消除三垢冥」、左に「広済衆厄難」とある。「三垢の冥を消除して広く衆の厄難を済う」という『無量寿経』の一節であるが、祐天上人が一生を通して衆生を救済した行動と一致する。

ノイローゼとポックリのご利益（伊勢シリーズその２）

大正大学教授　玉山成元

宝泉寺大奥様の話によると、このお像は重病者を引きつけてなおす力があるという。昭和三十年ごろらしいが、ある男性が道端の祐天さまに参詣ののち、導かれるままに厨子のあるお堂に入った。じっとして動かず、何を尋ねても答えない。そこで奥様は『般若心経』を一巻読み、「南無阿弥陀仏」といってお念仏しなさいと教えてやった。男性はいかにも気持ち良さそうにして帰ったが、その後親族から、実はノイローゼで困っていたが、お蔭様で落ちつきましたというお礼の電話をいただき、あらためて祐天上人のご利益を知ったという。また最近もそうしたことがあった。今度は女性で、病院の精神科に入院していたが、ある日、宝泉寺をたずねて祐天上人と結縁し、念仏信者となって六年間社会生活をすることができた。その後ふたたび病院にもどることになったが、帰ってみると、以前一緒に退院した人々が全部もどっていた。しかも他人は一年か二年でもどったのに、自分は六年間も世間で過ごすことができたのは、祐天上人のお蔭だといって喜んでいたという。

寛文十一年（一六七一）祐天上人は、お師匠さんの檀通上人と一緒に下総国飯沼弘経寺で修行中、近くの羽生の里に住む菊という娘が急にノイローゼになった。近所の人々も八方に手をつくして治療方法を考えたが、どうすることもできず困りきっていた。その話を聞いた祐天上人は、菊の枕元で十念を授け、さらに近所の人々と一緒に百万遍の念仏を行って菊の病をなおしたことがある。それと同じような、ご利益が現在もこの地に残っていることを聞き意を強くした。

大正七年（一九一八）三月七日、宝泉寺では祐天上人二百回忌法要を行った。当日は二〇人のお稚児さん行列もあり、昼夜にわたってにぎわった。そのとき記念に大傘を求めたことが『過去帳』に記してある。私は祐天上人にまつわる信仰がいきいきと伝承されている地をおとずれ、今なお多くの人々から親しまれている現実を認識し、ひとしお祐天上人の徳の高さを肌で感ずることができた。

（本法の都合によりこの項終わり）